三河の昆虫
No. 11　1975年7月

〒448 刈谷市井ケ谷町
愛知教育大学昆虫研究室内
三河昆虫研究会　発行
第一プリント社　印刷
☎ (0564) 21 4463

茶臼山のコメツキムシ雑記

大平仁夫

愛知県北設楽郡にある茶臼山（1,415m）は，県下では最高峯の山としてよく知られており，昆虫類の報告も多い。

ここのコメツキ相は，あまり豊富ではないが，今まで調査が不足していた5月～6月頃のをみることができたので，ここに報告する。ここに記録した種は，1975年5月24日～25日と6月15日の2回にわたり，主として山頂周辺の雑木林で筆者が得たものである。

ベニコメツキ亜科

1. *Denticollis miniatus* (Candeze,1885)

ベニコメツキ

茶臼山では5月24日頃が最盛期のようで，雌雄とも多くみられた。6月15日には，前回より個体数が少なかった。

2. *Denticollis nipponensis* Ohira,1973

ニホンベニコメツキ

茶臼山では前種より個体数が少ない。本種も5月下旬頃が発生の最盛期のようであった。

ツヤハダコメツキ亜科

3. *Gambrinus vittatus* (Candeze,1873)

タテジマカネコメツキ

1♂，24－V；1♂1♀，15－VI。

茶臼山では個体数は少ない。しかし，ここで得られるものは体長9mm内外の大型（洞穴性?）のものが多い。

4. *Gambrinus kraatzi nihonicus* Kishii,1966

フタキボシカネコメツキ

1♂，24－V。

愛知県ではまれな種である。県下では他に北設楽郡大野瀬からの記録があるのみである。

ヒラタコメツキ亜科

5. *Acteniceromorphus tengu* (Miwa,1934)

テングフトヒラタコメツキ（第1図，A）

1♀，24－V。

本州と四国に分布するが，きわめてまれな種である。本種のタイプの基産地は長野県の戸隠山である。愛知県からはここが最初の記録である。

6. *Actenicerus pruinosus* Motschulsky,1860

シモフリコメツキ

茶臼山では，5月下旬頃に頂上周辺に多い。

7. *Corymbitodes gratus* (Lewis,1894)

ドウガネヒラタコメツキ

1♂1♀，24－V。

普通種であるが，愛知県では個体数が少ない。茶臼山でもまれに得られるのみである。

8. *Corymbitodes obscuripes* (Lewis,1894)

コゲチャホソヒラタコメツキ

4♂4♀，24－V；2♀，15－VI。

発生期間が短い種のようで，茶臼山では山頂近くのわずかな範囲で得られる。6月に入るともうほとんど得られなくなる。

9. *Corymbitodes rubripennis* (Lewis,1894)

オオベニホソヒラタコメツキ（第1図，B）

1♂，20－V。

翅鞘が朱色をした美しい種で，愛知県ではここが最初の記録である。

コメツキ亜科

10. *Ampedus rufipes* (Lewis,1894)

アカアシクロコメツキ

1♀，15－VI。

茶臼山ではまれに得られるが，九州あたりのものに比して前胸背板の点刻がより粗雑である。

11. *Ampedus vestitus* (Lewis,1894)

ケブカクロコメツキ

1♀，15－VI。

Ampedus 属の種は茶臼山では少ない。その他，まだ同定のできない種が得られているが，これについては別に報告する予定である。

カバイロコメツキ亜科

12. *Ectinoides insignitus* (Lewis,1894)

ヨツキボシコメツキ

1♀，15－VI。

茶臼山では個体数が少ない。山地だけでなく平地でも得られ，筆者は岡崎市の山林でも得ている。

13. *Ectinus insidiosus* (Lewis,1894)

キアシクロムナボソコメツキ

1♀，15－VI。

山地性の種で，愛知県では他に北設楽郡大野瀬から得られているのみである。

14. *Ectinus sericeus* (Candeze,1878)

カバイロコメツキ

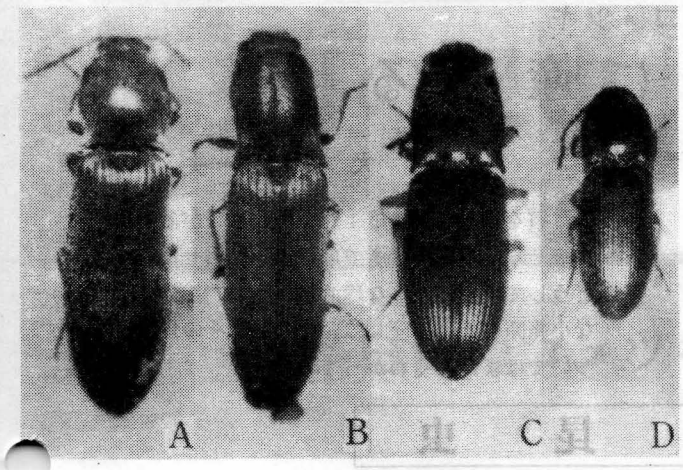
茶臼山や段戸山で5月から6月頃に得られる個体は，翅鞘が暗褐色（ときな黒色）で，会合線部が黒色をしていて，一見ムネナガカバイロコメツキを思わせるものが多い。雄交尾器の形はカバイロコメツキに最も近いが，これとは若干異る点もあるので，詳しくは今後調査して決めたいと思う。

段戸山のコメツキムシ雑記

大平仁夫

愛知県北設楽郡裏谷には原生林があって，ここのコメツキムシの一部についてはすでに大平（1973）が発表した。しかし，これはかなり古い記録をまとめたもので，最近のものについては断片的にしか知られていない。

筆者は1975年6月に，2回にわたってここのコメツキムシを調べることができたので，その一部をここに記録する。この調査にあたって，虫友の松野更一，山崎隆弘，伴憲隆の各氏に種々協力を頂いた。ここに心から御礼申し上げる。ここでいう段戸山とは，裏谷の原生林のことである。



ベニコメツキ亜科

1. *Denticollis miniatus* (Candeze,1885)

ベニコメツキ

原生林内で6月頃に得られるが，個体数は多くない。

2. *Denticollis nipponensis* Ohira,1973

ニホンベニコメツキ

原生林内での発生期は前記種とほぼ同じである。しかし，茶臼山より個体数が多いように思われる。

ツヤハダコメツキ亜科

3. *Nothodes marginipennis* (Lewis,1894)

ヅグロチャカネコメツキ

岡崎付近では4月下旬頃に出現するが，原生林では6月上旬頃に得られる。花に飛来していることが多い。

ミズギワコメツキ亜科

4. *Quasimus japonicus* Kishii,1959

ニホンチビマメコメツキ

本属の種も原生林内ではまれにしか得られないが，6月1日の調査のときには，段戸湖畔に自生しているクヌギやミズナラなどの葉上より20頭あまり採集した。

5. *Yukoana carinicollis* (Lewis,1894)

ヘリムネマメコメツキ

原生林内では本属の種は少なく，まれにしか得られていないが，6月1日に段戸湖畔に生えている1本のミズナラの木より20頭あまり採集した。

ヒサゴコメツキ亜科

6. *Ascoliocerus fluviatilis* (Lewis,1894)

キアシヒラタヒサゴコメツキ(第1図，C)

1♀，1－VI，松野。

原生林内の谷川の石下でまれに得られる。愛知県では近似種のヒラタヒサゴコメツキはまだ採集されていない。

ヒラタコメツキ亜科

7. *Selatosomus onerosus* (Lewis,1894)

トラフコメツキ

1♀，1－VI，大平。

平地では4月頃に得られるが個体数は少ない。原生林では今回が最初の記録ではないかと思われる。

8. *Eanoides puerilis* (Candeze,1873)

シリブトヒラタコメツキ

1♀，1－VI，大平。

原生林内では少ない種である。筆者の所蔵標本の中に，1954年5月に採集された標本があるが，その後の記録はないようである。

コメツキ亜科

9. *Ampedus honguanus* Ohira,1962

ホングウチビクロコメツキ(第1図，D)

1♂，1－VI，伴。

本種は，大平(1962)によって三河本宮山で採集された標本にもとづいて新種として記載された種で，その後和歌山県から記録があるのみである。今回伴氏によって原生林内で得られたものは雄個体であるが，きわめて珍らしい種である。雌個体は未だ発見されていない。今までの数少ない記録から推察してみると，本種は暖帯広葉樹林に発見される種のように思われる。

キアシヒラタヒサゴコメツキ
本宮山に産する

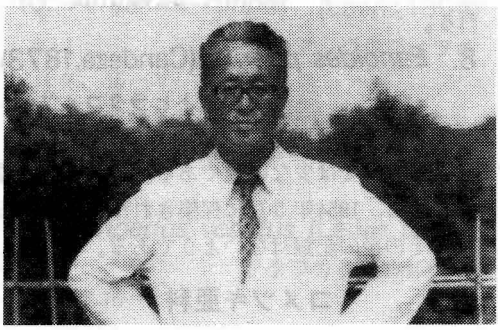
大平仁夫

本年の4月に，虫友の山崎隆弘氏から，4月6日に三河本宮山のくらがり渓谷で，キアシヒラタヒサゴコメツキを発見した旨の連絡を受けた。5月5日に私も出掛けて生息場所を確認した。その場所は，渓谷に小石などが推積した所で，石を起こすと雌雄1対づついるのが多かった。そして，その場所では普通に見出せたが，どうして，このような珍らしい種が，このような小範囲の所に多産しているのか，その理由についてはまだよくわかっていない。

私と昆虫
—その10—

大平仁夫

私がどうして虫好きになったのかよく覚えていないが，小学生の頃はもっぱら魚採りをやっていた。私の兄弟は全部こういうことが好きで，今でも兄弟は釣りをやっているが，私だけがそれからはみだして虫採りになったということらしい。



私は，中学生になってから虫採りを始めた。それは，私の郷里の隣村が，名和昆虫博物館を建てた名和靖氏の生まれた所で，この郷土の偉人の話は父からもよく聞かされていたので，生物クラブでこの博物館を尋ねたことがどうやら始まりのようである。それからはチョウを夢中で集めたが，卒業する頃になるとガが面白くなり，ヤガ科を専門にやろうと思って文献や標本を集めたし，カメムシをやろうと思ったこともあった。そして，妙な縁で名和さんの所に勤めることになり，そこにおられた松下伝吾氏の影響で，今度は甲虫を集め始めた。それから，東京農大の昆虫研究室に入ってからは，コメツキムシをやることになった。しかし，コメツキムシは数も多くて，形がどれも似ており，独学の私には名前を知ることも容易ではなく，2～3年間は，ただ虫を眺めているだけという日が続いた。そのうちに，内外の研究者の指導を得たり，幼虫の研究から大体の系統関係がわかり，少しづつではあるが分類のこともわかってきた。

今ふりかえってみると，あれからもう20年あまりたってしまったし，そのたどってきた足跡は，田舎道のぬかるみを歩いてきたような泥まみれの姿であったような気がする。そして，ときどきよく今まで続けてこれたと思うことがある。また，20年かかったその足跡のうえに，コメツキ学上どれだけの仕事が残せたのかを考えると，心細くなることがあるが，どんな荒道だけでもつけておけば，いずれ何かの役に立つと思って仕事を続けているわけだが，それにしても，次々と解決しなくてはならないことばかりが多くて，それを消化する時間のあまりにも少ないことを，この歳になって思い知らされているこの頃です。

• 本号の印刷費は全額著者負担 •